

【聖書箇所】

23:32 ほかにも、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。 33 「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた。 34 「そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」」人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。 35 民衆は立って見つめていた。議員たちも、あざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」 36 兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、 37 言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」 39 十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」 40 すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。 41 我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」 42 そして、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と言った。 43 するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。 44 既に昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。 45 太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。 46 イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。 47 百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を賛美した。

24:1 そして、週の初めの日の明け方早く、準備しておいた香料を持って墓に行った。 2 見ると、石が墓のわきに転がしてあり、 3 中に入っても、主イエスの遺体が見当たらなかった。 4 そのため途方に暮れていると、輝く衣を着た二人の人がそばに現れた。 5 婦人たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は言った。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。 6 あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない。 7 人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか。」 8 そこで、婦人たちはイエスの言葉を思い出した。 9 そして、墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせた。 10 それは、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、そして一緒にいた他の婦人たちであった。婦人たちはこれらのことを使徒たちに話したが、 11 使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった。 12 しかし、ペトロは立ち上がって墓へ走り、身をかがめて中をのぞくと、亜麻布しかなかったので、この出来事に驚きながら家に帰った。

1 二人の男

さきほど、主イエスの十字架と復活の物語をルカによる福音書から聴きました。今日の復活祭—イースターの礼拝では、この物語から、甦りの主イエス・キリストと出会った二人を通してイエス・キリストの十字架と復活の恵みに預かり、皆さんと共に復活祭を喜びたいと思います。二人とはひとりとは名もなき犯罪人、そしてもう一人は、主イエスの一番弟子であるペトロです。

2 初めての教会

金曜日、イエスが真ん中に、そして両側の二人の犯罪人が十字架につけられています。衝撃的な説教があります。されこうべという名の丘に立った三本の十字架、そこに最初の教会ができた…そう語った説教者がいます。奇妙なことを言う…と思う方も多いでしょう。教会が生まれたのは主の十字架よりも後の聖霊降臨の日だ…とか、あるいは、十字架よりももっと前、主イエスが弟子達と共に生活し始めた様子に教会の最初の姿を見る…それが常識的な考えだからです。しかし、この説教者は、主イエスと共に十字架につけられ、死につつある罪人の姿に最初の教会の姿を見出すのです。既にそこに、やがて生まれる教会の姿が先取りされているからです。

そして更に続けてこういいます。「この十字架につけられた犯罪人達は十字架に釘で打ち付けられている。身動きができない。逃げるわけにはいかない。主の一番弟子のペトロは裁かれておられる主イエスを捨てて逃げた。主イエスとのつながりを自分から捨てた。ところが、犯罪人たちは、ここでそれを捨てる事ができない。それが教会の特質のひとつだ。しかも、主イエスと共有するのは十字架の死である。」と。

男たちの名前は記されていません。犯罪人を処刑する刑場で、罪人（ざいにん）として人びとに晒されています。彼らの罪状もわかりません。ローマに反抗して立ち上がった革命家ではないか？という推測があります。だとしたら、自分たちがやった事は正義の業だと思っていたのかもしれませんが。

しかし、彼らは犯罪人として、人間の尊厳を剥ぎ取られ動物のように十字架に磔られた姿で人びとの前に晒されており、いままさにひどい苦痛と孤独のうちに死にいかうとしています。死に直面してイエスと結び付けられた人びとの集団。ここに教会がある…というのであります。

果たして、そこで何が起こっているのでしょうか。

3 死の瞬間の対話

犯罪人たちは、孤独で惨めな死を迎えようとしています。しかし、そのうちの一人は主イエスに、死を超える望みを見出そうとして、最後の力を振り絞り語りかけます。「主イエスよ、あなたの御国においてになる時はわたしを思い出してください」。主は答えられます。「はっきり言うておくれが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」。驚くべきことに、主イエスは、最も惨めで孤独で希望が全く見いだせないところ—十字架の上でさえ、罪人と対話をし、甦りの命を語っておられるのです。主ご自身と共に楽園、パラダイスに入るとの約束をお語りになる。死ぬ瞬間において、主のお言葉がこの男をまことの命へと生かしました。

4 「救ってみろ」という私達

しかし、そこには主イエスをののしった者もいました。39節“十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」”とある通りです。

これは他の者、ユダヤ人の議員やローマ兵と同じ態度です。「今こそ自分を救って見せろ」と言うておきながら、その実、全く主イエスを信じていません。

この男はとんでもない人間に思えます。私達とは共通点のない人たち、関係ない人たちのように考えて、この男の言葉を読み過ごしてしまいがちです。

しかし、本当にそうでしょうか。私達がとても困った時、いつも神に向かって祈れるのでしょうか、主イエスと父なる神を信じ抜くことができるのでしょうか。また信じているつもりでも実は神に命令していることがないのでしょうか。「今こそあなたの全能のみ力を発揮して私を救ってください。それがあなたご自身の名誉を守ることになるのですから」と神と取引することはないのでしょうか。

あると思います。私達も案外とこの者との距離は近い…いやむしろこの男こそ私達人間のありのままの姿と言えるのだと思います。確かな希望を見失っている人間の姿が、確かに教会にはあるのです。主イエスに呼びかけているようで、呼びかけてはいない、対話を期待していない。この男は耳を塞いで絶望のどん底にいるのです。

5 「主よ、思い出してください」という信仰

しかし、教会は絶望だけでは終わらないのです。そんな男に答えて、キリストを指し示す「もうひとり」がいるからです。「お前は神をも恐れぬのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受け

ているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」と自分達の罪を認め、そして真ん中に十字架にかけられているキリストを指し示すのです。

同じく十字架の上に苦しみながらも、ひとりには見えず、もうひとりには「何かが」見えていました。それはなんだったのでしょうか。それは、自分は罪があり、主イエスは無罪である…ということ。主イエスに「私を思い出してください」と語りかけた男は、「自分は正しい。それを認めず自分を有罪として死刑に定めた世間は間違っていた」と他者を糾弾することをやめました。それは自分とは違う者がそこにいる、全くの無実なのに、十字架につけられた方がいる…と知っていたから。

どうしてその事に気づいたのでしょうか。こう推理する人びとがいます。この男は、34節の主イエスの御言葉、「父よ、彼らをおゆるし下さい。自分が何をしているか知らないのです」という主のお言葉を最も身近に聴いたからだ…と。この祈りの本質が本当に実感できるのは、主と共に十字架につけられている二人の犯罪人だったでしょう。

「このお方は自分たちと同じ絶望的な境遇であるにも関わらず、自分を殺す者のために赦しを祈り求める人、自分とは全く異なる祈りをしておられる方、敵を赦す愛を知っておられる方だ」彼は十字架の上で自分たちとは全く違う方、敵さえ許す方を見出した。そこに死を超える命を見出し、「このお方こそ命を与えるというキリストに違いない」と確信したのではないのでしょうか。だからこそ、彼はこの救い主に自分を思い出してもらえれば、十字架の苦しみの中にも平安のうちに死んでいける…とそのように思ったのではないのでしょうか。

まさに主イエスを知り、命を見出した。ここに最初の礼拝する教会がある…のだと私も思います。

6 絶望で終わらない死を示す主

だから、主が答えられた「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」という言葉は、教会の礼拝に響いている言葉でもあります。

「楽園」とは、アダムとエバが、その罪のために追われたエデンの園とも考えられています。エバの名は「いのち」を意味したと創世記は伝えます。神に喜ばれる祝福にあふれた「いのち」の生まれでた楽園。そこを追われつつも、なお「いのち」という名を失う事のなかった私達人間。しかし、その命は、神に喜ばれる輝きを失った命、本来、住むべき所を失った悲しみの命、かりそめの命でした。

本来の私達の命が輝くところ、本来私達の命が住むべきところ、それは父なる神のみ前。平安の命のうちに過ごすことができるのは、見守る父なる神の眼差しのみ。しかし、人間は自ら神になろうとして、神のみ前に生きることができなくなりました。神との関係を壊してしまった、人間の命の悲惨さの根本はそこにある…と聖書は語ります。

だから、ユダヤの人びと、聖書の民は、自分たちの行いを通じて再び神との正しい関わりを回復させなくてはならない…と考え、自分たちの行いで神との関わりを回復できた人を正しい人びと、義人と呼び、正しい人びとだけが神の楽園に招かれる。と信じていました。

その楽園に、十字架にかけられた男が招かれています。正しい人しか入れないと言われたまことの命の楽園に、犯罪人であるこの男は招き入れられました。しかも、主イエスと共に楽園に入るのです、父なる神のそば近くにいる。この死の日、最悪の日に、死を突き抜ける命の同伴者となりました。これこそ、十字架の主と私達が、教会が礼拝の時に交わす「対話」です。不安も傲慢もない、神の子としての確かな平安がある。私達は日曜日の礼拝の度に、そして各々が日々捧げる礼拝する所で、このキリストとの対話に招かれています。だから礼拝は、死で終わらない希望に生き始める場所でもあるのです。

主イエスと二人の犯罪人は息絶え、三本の十字架は倒され、最初の教会の姿は消えさりました。しかし、主の物語、教会の物語はそれでは終わりません。息ある者達の間で、キリストの甦りから始まる教会の姿がゆっくりと現れてきます。

7 主イエスの復活

主イエスが十字架に磔になったのが、金曜日。その三日の後、主イエス・キリストは復活されました。聖書は主イエスが復活する時のご様子を一言も語ってはいません。人知を超える神の業を語る言葉はありません。復活を記念する礼拝で講壇に立たされている私も、主イエスの甦りの喜びに生かされています。が、それをどのような言葉で言い表せるのか、思いあぐねています。「これこそ復活である」と教科書の定義のように語ることはできません。むしろ、主の甦りと出会った人びとの姿から見ていく事がふさわしいようです。今日は主イエスの復活を主の一番弟子ペトロの姿から観ていこうと思います。

8 立って走るペトロ

墓はからであり、主は甦られた…天使の言葉を仲間の女性が伝えるやいなや、ペトロは立って走って行きました。どこへ行ったのか、墓へと行きました。おそらくペトロが墓に向かって走るのはこの日が初めてだったでしょう。皆さん

もお墓に喜び勇んで走っていくという事はないと思います。およそ待ちきれないと走り出す先として墓ほどふさわしいものはないのですから。なぜペトロは走り出したのか。そこに愛する人、懐かしく慕わしい人。死んだと思った方が死んでいなかった、まだ生きておられるかもしれない…と思ったからでしょう。

9 一番弟子ペトロの裏切り

なぜペトロはそこまで「死んでいなかった主イエス」にお会いしたかったか。ペトロは、福音書のなかでは最も知られた主の一番弟子です。様々なエピソードを通じて、素直で純粹、思い立ったらすぐに行動に移してしまうおっちょこちょいな面もある愛すべきペトロの姿が描かれています。弟子達のうちで誰よりも、主イエスを信頼し従った人でもありました。主もいつもペトロを自分のそばに連れていました。他の誰よりも主イエスの側にいた人と言ってもよいでしょう。しかし、そのペトロが主イエスを裏切ります。見捨てて逃げるのです。

話は十字架にかかる前の日、木曜日の夜にさかのぼります。主は十字架にかかる為に逮捕されることを覚悟し、ペトロにいいます。「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰がなくならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」。“シモン”とはペトロの別の名前です。そして、「サタンが弟子達を小麦のようにふるいにかける」というのは、主が十字架に架けられる為に逮捕される時、弟子達は恐怖のあまり、主イエスを見捨てて逃げ去る…ということ。この主の言葉にペトロはこう答えます。「主よ、ご一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しています」主は答えます。「ペトロ、言うておくが、あなたは教、鶏がなくまでに三度私を知らないという」

実際はどうであったか。主イエスがあっけなく逮捕され縛られて大祭司の屋敷に連れて行かれた時、ペトロは密かに後をおい、大祭司の屋敷の中まで入り込みます。しかし、屋敷の者に見つかり「あなたも、あのイエスという男の仲間だ！」と糾弾された時、ペトロは恐ろしさのあまり、「イエスなんて男は知らない、なんの関係もない」と主を拒絶するのです。三度も。完全に徹底的に主を否定します。三度目、ペトロが「あんな男は知らない」と言い終わる前に夜明けを告げる鶏の声がしました。すると、主イエスがペトロを振り返って見つめられた…とルカ福音書は記します。なんの罪も犯していないのに不当に逮捕され、味方もおらず無実の罪を着せられて裁かれる主イエス。保身の為に、「あんな男は知らない」と叫んだペトロ。そのペトロを包む主の眼差し。ペトロは外に出て激しく泣いた…とルカは続けます。

ペトロは、重罪人として最も悲惨な十字架刑にあおうとする主を見捨てた、主の眼差しのなかでペトロはその事を知りました。自分の罪を突きつけられました。その後のペトロの様子を福音書は何も語りません。

10 空っぽの話

悪夢のような木曜日の夜があけ金曜日、主の十字架の日。そして更に三日の後の日曜日の朝。主イエスの甦りを最初に御使い達から告げられた女性たち。彼女達は急いで戻って、聞いた話を使徒達に伝えます。しかし、その使徒達はこの話をたわごとのように思った…とあります。この「たわごと」という部分を、ある外国語の聖書は「空っぽの話」と訳しています。内容がない、くだらない話だと思ったのです。女性たちは悲しみのあまり妄想を抱いたにすぎないとでも思ったようです。

このように、主の復活を語る言葉は、たわけた話、くだらない話、耳を傾けるに値しない話…そのように最初から受け止められてきたのであります。それはそうだと思います。本日は礼拝のあと、午後から日野墓苑で墓前礼拝をもちます。私達には、私達に先立って復活の信仰に生きそして召天された信仰の先輩がたくさんいます。しかし、この時のペトロや弟子たちにとって、そのような主の復活の証人はいません。ただいきなり女性たちの言葉を聞いたのです。だから、弟子達がその言葉を聴いてすぐに信じることができなかつたとしても、むしろ当然であつたでしょう。

11 走り出すペトロ

しかし、ペトロだけは立ち上がりました。私達はその姿に目を向けたいと思います。ペトロを立たせているもの、墓に向かって走らせたものに目を注ぎたいのです。この12節の「立ち上がって」と訳されている言葉は、「主イエスが甦った」という言葉と同じ。ペトロもまたここで新しく甦らされ立ち上がらされた、走らされた。十字架の主イエスを裏切った、大きな罪を犯し、その自分の罪に崩れに崩れていたペトロ、絶望の淵に佇んでいた男が、立たされた、走らされました。そして、向かった先の墓はからでした。

12 からの墓

私達人間にとって、死んでそして甦る事は確かに信じがたいことです。信じることはできない。しかし、キリスト信仰の根幹は、このキリストの甦りを信じるということです。復活の信仰なくしてキリストを信じることはありえない…と使徒パウロもいっています。主イエスの復活を信じるとは、私達の人生の最後を固く強く死の力が握り締めていた、しかし、主イエスの十字架と復活によって、その死の力が虚しくなっている事を知る事だからです。

墓に向かって走り出したペトロも最初はその事がわかりませんでした。ペトロが求めていたのは、「十字架について苦しんだけれども実は死んでいなかった主イエス」の姿であったでしょう。しかし、そうではなかった。墓はからであった。ペトロが期待していたよりもはるかにすごい事が起こっていたのです。

罪の力、死の力が討ち滅ぼされていたのです。墓はその意味を失っていた。主イエスは死ななかったのではない、確かに死んだ、それも罪ある人として死んだ、そうして甦ってください、死を呑み込んだ圧倒的な力、まことの命の力を示してくださいましたのです。それは、今までになかった事でした。全く新しいことだった。いままさに、ペトロはこの全くあたらしい命へと走り出したのです。

からの墓を見て戻ってきたペトロは、絶望の淵に佇んでいた男とはことになりました。何かが起こっている、自分を越えた力が働いている、その事を感じていたのでしょう。ペトロはここですぐに主イエスの復活を信じたわけではありません。この一日あと、甦りの主イエスが実際にペトロ達の前に姿を現して初めて信じる事ができました。そして、主イエスの十字架と復活を生涯宣べ伝えていく者となります。しかし、全ては、からの墓に向かって走り出したあの朝に始まっていました。

復活のキリストを信じるという事はこのペトロのように立たされる…ということから始まるように思います。自分の罪を知る、死なねばならない者、神のみ前で真実にいきる事ができない自分のかりそめの命を知る。しかし、そこから立ち上がらせ、そしてからの墓に向かわせる力が与えられる。自分を縛っていた罪の力、死の力から自由にされている事を知らされるために。私達を教会の礼拝へと向かわせる力と同じものではないでしょうか。

13 私達の絶望

どうしてそう言えるのか。私達の現実もまた多くの絶望があるからです。死があります。肉体の死だけではなく、希望なく生きる事の死もあります。病があり、様々な困難があります。親しい人でも心が通じ合わない痛み、苦しみ。人に能力で評価される社会、「生きているだけで尊い」とは思えない命。そんな中で私達は罪を犯します。神を見失い、人を傷つけ、そうすることによって何より自分を傷つけている現実。その苦しみに喘いでいる現実。喜びの命ではなく死に取り囲まれたような現実があります。

しかし、私達を固く縛り付け支配しているかに見える絶望は、もうその力を失っている…主イエス・キリストが十字架にかかって、私達の絶望全てを、私達人間の絶望全てを引き受けてくださったから。そして、主は甦られました。主を支配していた絶望、死の力は打ち砕かれたのです。

私達はこのことを記念して毎週日曜日、礼拝します。死に打ち勝ったキリストとそこで出会い、あたらしい命に生きるためです。キリストの命に生きるの

です。自分に死に、キリストの甦りの命のうちに生きることを新たに始めます。それが教会であります。

私達はこれから聖餐式を持ちます。十字架の上に裂かれた主のからだと、十字架の上に流された主の血潮を共に味わうことで、古い自分に死に、キリストのあたらしい命に生きることを追体験します。そして、御子が甦られたこの朝、罪が滅ぼされたこの朝を与えられたことをこの身に覚えるため、聖餐にあずかるのです。御子の十字架と復活によって、私たち罪人を、全くあたらしい命にいかす、父なる神を高らかに賛美したいと思います。